

和田城跡 ― 高崎の中世を考える

清水 豊

（かみつけの里博物館）

1. はじめに 和田のつく地名

- ・上和田町
- ・下和田町
- ・和田多中町

2. 和田城研究史

(1) 山崎一氏の研究 絵地図、史料に基づく研究。

- 「御城御土居通」「御植物木尺附絵図」（江戸時代）
- 「興禅寺絵図」（中世後期）
 - ・高崎城本丸と烏川の間にある「西郭」付近を想定。
 - ・崖線に直交する 4 本の堀 → 「連郭式」の構造

(2) 茂木渉氏の研究

- 高崎城西郭を「本郭」とし、その南北に 1 郭を設けた「並郭式」の構造。
 - * その北・東・南に郭を設け、「囲郭式」構造となった。
 - * 高崎城「遠構」の障子堀から、天正年間に宿を囲む「総構え」の存在も

3. 和田城・鎌倉道に関する近世・近代の記述

- (1) 『上野国赤坂庄和田記』 江戸時代 興禅寺の僧
- (2) 『高崎寿奈子』 宝暦 5(1755)年、西田美英
- (3) 『高崎志』 寛政元(1789)年、川野辺寛
- (4) 『高崎城大意』 享保年間、山本十左衛門幸運（高崎藩軍学者）
- (5) 『更正高崎旧事記』 明治 16(1883)年、土屋老平
- (6) 『高崎繁盛記』 明治 30(1897)年、篠田尚久

3. 和田城の記述

- 『高崎城大意』

「此時は、本・二の郭にして三郭なし」

4. 和田城築城の記述

□『高崎志』

「高崎城ハ和田氏ノ故墟也、和田記ニ正長元年戊申、和田八郎義信和田城ヲ築ク」

＊故墟・・・古い城や都 ＊正長元年 西暦 1428 年

5. 甲斐武田氏による普請

□『上杉謙信書写状』（三州寺社古文書）

「和田少地ニ候得共、晴信年（念）を入いかにも堅固ニしらわれ候間 落居さうなくつき堅候」

＊上杉謙信（輝虎）が、家臣の金津・吉江・本庄氏に関東の近況を伝える。
書かれた年代は不明。永禄 7 (1564)、または、永禄 8 (1565) 年か。

□『和田記』

「和田ノ城モ無心許思召故、コレモ馬場信房縄張ス」

＊馬場信房（信春） 1515～75 年 武田氏家臣。

□『武田信玄書状』（円満寺文書）

「和田之普請未熟候所候、一段窮屈候条、寔雖当手之衆勞兵沙汰之限候、重而為普請人」

6. 城内の名称

□『清水寺棟札銘』天正 11 年極(12 月)17 日 和田信業が本堂再建する。

「実城郭内」という用語を使う。

＊実城・・・本丸に相当する主な郭。

7. 高崎城内の発掘調査

(1)過去 25 回にわたる調査を実施。

・和田城関連と想定される、「15 次、22 次、23 次 24 次 25 次」調査。

① 15 次調査での知見

○ 3 号堀一和田城想定地内最大の堀

・堀の幅 16.5m、深さ 5 m 以上、17 号線を挟んだ東側へ続く。

○畠跡

・天正 15 (1590) 年～慶長 3 (1598) 年の間に耕地としていた可能性。

○高崎絵図『烏川沿焰硝蔵付近崩れ』

・表現される井戸が検出できず、当時の崖線が崩壊している可能性。

② 22 次調査での知見―城地拡張に伴う遺構群

- 3 号溝（堀の幅 6.7m、深さ 5.13m）
- 4 号溝（堀の幅 2.95m、深さ 1.95m）
- 6 号溝（溝の幅 3.6m、深さ 2.45m）

＊23 次調査検出の 2 号溝跡と繋がる。

＊ 4 ・ 6 号溝跡出土品

- ・ 信濃型内耳土器の出土。時期は 16 世紀後半。
- ・ 金属加工関連（韃の羽口）の出土。

③ 23 次調査での知見

- 1 ・ 2 号溝（幅 4.5m、深さ 2.6m）
- ・ 信濃形内耳土器、天目茶碗や水滴の出土。
- ・ 金属加工関連（埴塙・韃の羽口・転用取鍋）の出土。⇒銅を含む合金。

※溝跡の堆積した土の分析（植生）

- ・ 水生植物の生育痕跡がない。⇒ 「空堀」
- ・ 赤松、ニワトコの木が生えている。
- ・ 寄生虫卵（回虫・鞭虫）を検出。⇒ 周辺に便所の存在。

※溝跡出土の木材の分析

- ・ 放射性炭素年代測定 測定値 ⇒ 1460～1671（室町～江戸時代）年の間

④ 信濃型内耳土器の発見

○信濃型と信濃型の亜種の 2 形式を認める。

＊和田氏は、永禄 6 (1563) 年 6 月をさかのぼらない時期に、武田氏へ従属。

【史料①】高崎市史 史料編 4 309

- ・ 武田氏へ従属するにあたり、和田信業が甲府へ参上。
- ・ 山宮氏は、昼夜問わず「和田本城へ在陣」
- ・ 跡部信秋、板垣信安へは、上杉来襲の際、本城在陣を指示。

【和田信業】

- ・ 天正 3 (1575) 年、長篠の戦で戦死した、和田信繁の家督を継いだ。
- ・ 甲斐武田氏譜代家臣である跡部勝資の子で、和田信繁の婿養子となる。

8. 鎌倉道一和田城下の主要道

□『高崎寿奈子』

「往古此所を赤坂というのは、都の方より来たりて此所へは坂を登り土も赤土たるによりて赤坂と云か、昔の通りは今の赤坂門二ノ宮のきわへ上り、夫より今の大染寺の方 佐野村へ通る鎌倉道也」

□『更正高崎旧事記』

「馬上宿旧趾ハ、旧三丸南ノ方ヨリ東ニ折レ、光明寺辺ヨリ南ニ曲リ、鎌倉道ヲ云、今馬上石ハ名勝ノ名残也、此道鎌倉道往還也」

□『高崎志』

「今高崎城赤坂門の外の坂は、即古の赤坂也 門内の南を赤坂山と云、此所に榎多くあり故に榎ノ森とも呼り、昔は鎮守赤坂明神の祠あり、和田氏居住の頃は、民家其北より東南に立つづけり、是所謂和田宿也」

「其南に馬上宿植横町など云里あり 是亦和田城下の町也 馬上宿は今の代官町の辺にありしと云う 植横町の所在定かならず 今の植竹の地なりともいふ 是より佐野の渡しを過ぎて 山名へ出る鎌倉の往還也」

9. 興禅寺絵図を読み解く一群馬県内最古の絵図の可能性

(1) 絵図の概要

- ・ 横幅 50cm、16 折で畳まれる（現在は軸装）。高崎市指定重要文化財

(2) どのような内容か

- ・ 興禅寺内の施設の配置図。隣接する鎌倉道や「和田ノ城」を含む。

(3) 誰が作成した（持っていた）か。

○「僧文瑚」

- ・ 珊恵文瑚（さんけいぶんご） 興禅寺初代住職 長源寺八世住職
- ・ 没年は、天文 21（1552）年 12 月 20 日

(4) 誰に与えたか。

○「為景都寺」 *都寺（つうす）・・・寺の事務監督者。

- ・ 為景清春（いけいせいしゅん） 興禅寺二代住職 長源寺九世住職
- ・ 没年は、天正 11(1583)年 3 月 28 日

(5) 絵の概要

○寺の施設は文字と範囲のみで表現。神社は絵で表現。

・「仏殿」を中心に位置づけた表現手法。

＊発掘調査で、中世の瓦出土がないことから、有機質な屋根材。

○新田氏光（新田朝氏（ともうじ） 1274～ 新田本宗家 7 代当主 義貞の父

・絵図にある「客殿」 ⇒ 新田氏光公建立

・『白龍山興禅寺縁起』 ⇒ 「梵鐘 1 口 新田氏光公寄進」

○「ふじやま」

・『高崎志』

「興禅寺の南東にあり、高さ三丈周囲 80 間ばかりあり、上に浅間宮あり。」

＊80 間から導き出した直径 46.1 m。

＊発掘調査で確認した浅間山古墳の直径 50 m

○「白龍池・南カンノン道」

・63 号溝（高崎城三ノ丸遺跡検出） 上幅 10m、深さ 2 m。

(6) 絵図の年代

珊恵文瑚が作成（所持）したものであれば、没年以前に製作した。

⇒1552 年 12 月 20 日以前 ⇒ 絵図としては「群馬県最古」

10. 和田三石

「昔名高き石也と云、されども今それと識る人鮮し、故老に問い亦詳ならず、所謂三石は、上和田の円石、和田の立石、下和田の方石也【『高崎志』】

○上和田の円石（光徳寺境内）

○和田の立石（高崎神社境内）

○下和田の方石（舘出張 佐藤病院の庭内）

○高崎城築城の際の出来事や、奇異な伝承

移動してはならない仕掛け ⇒ 「土地利用の指標・標石」の可能性。

11. 小結

和田城の変遷の予察

第Ⅰ期 （武田氏従属前）連郭式 並郭式 馬上宿 植横宿 鎌倉道

第Ⅱ期 （武田氏による整備）囲郭式 和田宿・鎌倉道の整備も実施